ドストエフスキーを読む会 リニューアル後 2回目の報告

2025年6月14日(土) 14時~17時

文京区勤労福祉会館 第2洋室

参加者 9人

報告者 山崎豊さん 『罪と罰』第6回

報告テーマ キリスト教(ロシア正教)と『罪と罰』

報告の概要

- ・ 山崎さんは手書きの『罪と罰』を読み解く図、ヨハネ伝11章の解説のレジメなどをもとに以下のような発表を行った。
- ・ 『罪と罰』は新約聖書ヨハネ伝的である。特に11章の「ラザロの復活」に注目。ロシア正教は特にヨハネ伝を重視している。ドストエフスキーがシベリアで手にしたのは新約聖書ではないか。
- ・ ヨハネのアイロニー(皮肉、あえて逆のことをいう、偽装、装うなどの意味がある)という言葉に着目。ロシア正教は「苦しみ」が強調される。苦しんだから聖者になれる、→十字架を交換し、ともに苦しむ。
- ・ キリスト・イエスが公生涯において行った奇跡のうち最大のものが「ラザロの復活」であった。→死者をよみがえらせる。死んでから4日たっているのに。
- ・ この奇跡は「キリストを信じるか」に通じる=死に打ち勝ったことを信じるか?ということに通じる→「死せる生」のラスコーリニコフが復活することにつながる。
- ・ ラスコーリニコフはポルフィーリーのラザロの信仰の質問によって、追いつめられていく。彼は神を信じていない。が、信仰がなくても救われるという考えがある。

質疑と議論

- ・ 当書のタイトルは『罪と罰』だが、『罪と救済』でもよいのではないか。この場合の罪は犯罪であり、キリスト教的原罪ではない。また、罰も神による罰ではなく、現世的刑法による罰を指している。したがって、『罪と罰』は適切ではないか。
- ・ 「新しいエルサレム」とは何か?→神を信じること。ラザロの復活を信じること。
- ・ ソーニャ(17歳の売春婦)がラスコーリニコフ(殺人犯の大学生)と出会って、神への贖罪を勧めるシーンには、両者の苦しみと共に凄さがある。
- ・ ソーニャという人間には他に類のない凄さがある。
- ・ 両者の苦しみはスヴィドリガイロフのようにほしいものが手に入らないことの苦しみとは違う。彼は非キリスト教的苦しみでしかない。
- ・ ラスコーリニコフは自分を非凡人だと勘違いし、リザヴェータをも殺害してしまった。

次回 8月9日(土) 報告は田尻道宏さんです。